『 雑 感 』

日々、実に多くの事柄や言葉を見聞きする中で、「当たり前のことのように扱われたり使われたりしているが、本当のところはどうなんだろう？」と、何かちょっと私としては引っかかる時があります。その本来の目的や意義、本質を捉えないまま、わかったふりをして、またはわかったつもりで、口にしたり、書いたり、行ったりするのはまずいなど、自分のこれまでの反省から思っています。以上のような立ち位置で、私の視点や感覚を基準に、「ちょっと引っかかること」などを、『雑感』というタイトルで文章にしてみました。いつものように、「まあ、そんな考えもあるよね」ということをご了承ください。

まずは、「学校スタンダード」。

この言葉を知ったのは、平成23年頃です。学校には、多くの「きまり」が存在し、指導する教員も時に認識できていないものもあるので、指導上重要なものに精選して「〇〇小スタンダード」とし、「きちんと指導しちゃんと評価改善していきましょう」というような感じだったなと記憶しています。

やがて、授業中の約束を各学校が絞り込んで「学習スタンダード」。各学校において校内生活上、ぜひあった方が良いルールとして絞り込んだ「生活スタンダード」。この取組がさらに進展し、「授業スタンダード（教師スタンダードと呼ぶところも）」が登場。学級や学年差のない、誰がやっても授業の基本的な進め方や児童生徒とのかかわり方は同じであること（そろえること）を追求するようになりました。

ところで、「スタンダード」は、辞書においては、「標準」、「一般のあるべき姿を示すものとしてのあり方」などの説明が見られます。そして、「標準」は、「基準」、「判断の拠り所や行動の目安」という意味のようです。さらに「当然」「普通」「基本的なもの」という意味で使われているようです。「スタンダード」の意味や捉えも、単純ではなさそうです。

さて、学校の取組としての「スタンダード」ですが、基本的な指導のあり方に差がないことは良いと思います。教員ごとに基準が違くと、指導される子どもたちは、困惑しますし、時に不満も抱きます。また、学級や学年によって、授業の進め方に大きな違いがあると、子どもは戸惑い、その違いに慣れるために苦労します（ストレスがたまります）。「金太郎あめみたいな授業は、画一的だ」と反論する方もおりますが、基本的な進め方は同じでも、指導者の工夫や表現力まで制限してはおりません。工夫のしどころはたくさんありますし、その教員の持ち味もいろんなところで活かせます。

さて、私が気になるところは、「学校スタンダード」の目的や意義を理解せずに、「スタンダードができて当然」とか「スタンダードをやるのは当たり前」という姿勢で指導する状況です。これですと、「なぜ」や「根拠」が欠落して「ねばならない」だけになり、要は子どもを型にはめるだけの指導になる危険性が出てきます。私としては、学校スタンダードの数は極力少なくし、これを組織的に取り組むことで、「〇〇な学校にしよう！」

など、学校改善のための効果的な手法にしたいなと常々考えています。押し付けや型はめではなく、教員と子どもが共に目指し共に努力して実現に迫る「在りたい姿」を学校スタンダードとすることが大事だと思っています。

次に、「消極的生徒指導」。

もはや、生徒指導とは、「中高生の問題行動に対応すること」という誤った認識を持っている教員はいないと推測いたします。生徒指導の本来の意味は、端的に申せば、「児童生徒のより良い成長を促す働きかけ」です。このような働きかけが「積極的生徒指導」と呼ばれ、「生徒指導の本質」とであると説明されています。この対極的な押さえとして「消極的生徒指導」があります。

消極的生徒指導は、対症療法的生徒指導とも呼ばれています。つまり、問題行動対応です。「後追い指導」とか「根本的な指導じゃない」とも言われています。教育現場での位置づけは低く、軽視される傾向さえ伺えます。なんとも散々な扱いをされています。

そもそも「消極的」という修飾語からして、良いイメージを持ちづらいのですが、「はたして消極的生徒指導の本質を適切に捉えた上で、そのように下に見るようなことを言ってますか？」と、私は言いたいのです。

発生した問題行動に対して、適切な対応や指導ができれば、以後の再発防止につながります。上手くいけば、その問題事象をきっかけに、当該の児童生徒、さらにはクラスメートに「より良く判断する力」が育てられる機会にもなります。そのためにも、速やかに事実関係を明らかにすることが必要不可欠です。要は、当該の事象に関係のある児童生徒からきちんと話を聞き取り「いつ、どこで、だれが、なにを、どのように、なぜ」をはっきりさせます。ここが一番大事であり、一番難しいところでもあります。

これができるのと、次はそれぞれの状況に応じた指導に入ります。事実が確認できていますので、「やったこと」や「やろうとした時の気持ち」「やった結果」などを振り返らせませす。穏やかに話しかけ、考える時間をとり、当該児童生徒からの「心からの言葉」を引き出すのです。きちんと事象に向き合わせ、必ず自らの口から、自分の言葉で、自分が関わったことに対する気持ちや考えを述べさせます。このことから、自らの行動のまづかったところに気づかせます。そして、これからの生活場面では同じ間違いをしないように意識化させることができます。当該児童生徒（時にはその保護者）の合意が得られれば、学級全体で考える機会にします。一人一人に、当該事象を自分事として考えさせるのです。結果、気づきや意識化が共有され、より多くの児童生徒に「より良く判断する力」が育まれることとなります。これらの過程が「指導」になります。

「消極的生徒指導」と言われている営みは、実は生徒指導の本質である、児童生徒のより良い成長を促す働きかけにつながるものであると、私は捉えています。ピンチをチャンスに変えることが可能なのです。個人的には、「生徒指導」という言葉の前に「消極的」や「積極的」という修飾語をつけないで欲しいなと思っています。

最後に、表現はともかくとして、児童生徒の問題行動への対応とその指導は、迅速さと適切さが求められます。鮮やかに解決に導けば、児童生徒、保護者、同僚からの信頼を得ることにもつながります。問題行動は、起きない方がいいのですが、起きた場合は、絶好の機会と捉えるくらいの姿勢で臨んでいきたいなと考えます。